

八文字屋本から京伝読本へ

矢 田 真 依 子

一 研究史と疑問点

八文字屋本と山東京伝との関連は、従来、消極的に捉えられていないだろうか。

その理由は、京伝の黄表紙『御存商売物』（天明二（一七八二）年刊）が、江戸の地本の勝利をうたい、上方の八文字屋本を排撃していることにある。

しかし、山口剛が、『読本集』（日本名著全集 一九二五年）解題で京伝読本『昔語稲妻表紙』（文化三（一八〇六）年刊）について、又平が南無右衛門の編笠を刺して妹の仇討に擬するくだりは、享保十五年の八文字屋本「契情阿国歌舞伎」の姿絵を斬つて仇討に代へる趣向「名筆の徳現はる、面影が一念の掛絵」をとつたのであつた。

としている。この後四十年以上、類似した指摘はなかったが、長谷川強「後期江戸文学と浮世草子―合巻を主として―」（『法文論叢』二十五号 一九七〇年三月）が京伝合巻『仇俠双蛭蝶全伝』（文化五年刊）の複数の趣向が八文字屋本『勸進能舞台校』（南嶺、延享三（一七四六）年刊）から得ていること、京伝合巻『濡燕子宿傘』（文化十一年刊）の全編半ばに近い量を占める部分が、八文字屋本『出世握虎昔物語』（其磧、享保十一（一七二六）年刊）によることを指摘した。さらに、大高洋司「『優曇華物語』と『月水奇縁』」（『読本研究』初編 一九八七年四月）が、京伝読本『優曇華物語』（文化元年刊）第八段は、かなりの長文に渡つて八文字屋本『風流曲三味線』（其磧、宝永三（一七〇六）年刊）の二を採っていることを指摘し、『山東京山伝奇小説集』（国書刊行会 二〇〇三年）収録『家桜継穂鉢植』（京伝遺作、文政五（一八三二）年刊）解題

(執筆担当本多朱里)が、同作の小雨と夢五郎の場面が『風流曲三味線』四の一「元服しても子共心」を典拠とすることを明らかにした。これらの事例は、八文字屋本と京伝との関連を積極的に認めるべき根拠となるのではないか。今後、両者の関連はどのように認識すべきなのだろうか。

この事柄について、現段階では明確に答えることができない。未だ判明している具体的事例が少なすぎる。そこで今回、

・八文字屋本『都鳥妻恋笛』(其磧、享保十九年刊)と京伝読本『優曇華物語』(文化元年刊)

・八文字屋本『風流川中島』(其笑・瑞笑、宝暦四(二七五四)

年刊)と京伝読本『昔語稻妻表紙』(文化三年刊)

・八文字屋本『風流友三味線』(其磧、享保十八年刊)と京伝読本『双蝶記』(文化十年刊)

の関連を確定し、今後の課題について述べる。

二 『都鳥妻恋笛』から『優曇華物語』へ

京伝読本『優曇華物語』(文化元年刊)は、恩を仇で返した悪人を苦難の末に善人(咬二郎・弓児ら)が討つ物語である。その中で、近江国志賀に住んでいた鍛冶橋内夫婦の娘(弓児)が驚に攫われてしまう。その後、渥美左衛門の養女となっていた弓児は、京都を遊

八文字屋本から京伝読本へ

覧して帰国の途中、僧侶の入定(実は悪人の大蛇太郎による詐欺行為)を拝する。以下、具体的に見ていこう。

さるほどに弓児……小野の宿を過ける時、あまたの男女うちむれて、かしこをさしてはしりゆく。衛守これを見ていぶかり、何事ありて彼者どもは、いそがはしくかしこに走りゆくやと人に問けるに、答ていひけるは、近年世ごぞりてその徳をかたり、諸人渴仰の思ひをなす、播州書写山の金鈴道人、おもひかけずこのごろ当国にいたり玉ひ、……けふしも彼山に入定し玉ふ。此事国中にかくれなく、あのごとく諸人群集してかの山にいたり、入定ををがみ奉るなり。

とあり、そして、

此後も道人入定の時には、さるは、せめて塚ををがまんとて、かの山にのぼる者おほし。息だしの竹につけてきけば、鉦の声かすかにきこえて、百余日たえず。……雨ふりてしづかなる日は、鉦の声ことによくすみてきこえけるよし。これを近江に雨鉦とて、のち／＼までも奇特のことにいひ伝へけるとなん

ところが、実はこの入定は詐欺であった。弓児が大蛇太郎に捕まった折、太郎が次のようなことをいう。

入定といつはり、あまたの布施物金銀財宝を奪とりかねてぬけ穴をほりおきて、夜中にぬけ出折／＼別人をいれて鉦をうたし

め、おもふまゝに諸人を欺て、後には雨鉦の塚といふ名をさへ残せり。……我十念をうけたること、心におぼえあるべし。我其時汝が美麗なる姿を見て、深くめでまどひ、……やがて入定の時にのぞみたれば、いかにともせんすべなく、只むなしく心をなやませしのみなり。

ここで注目したいのは、

① 美しい女が、群集を見て何事かと問いかけると、道人の入定があると教えられる。美女は自分も見てみたいと群集に混ざって山をのぼる。

② 道人は十念を授けた女に恋慕の情を抱く。

③ 道人は悪人であった。
の三点である。

さて、右の趣向は雨鐘伝説を踏まえたものだが、『山東京伝全集第十巻読本1』（ペリかん社 一九九四年）解題では、これを、『金玉ねぢぶくさ』一の二「讃州雨鐘の事」に基づくとしている。宝永七年刊の『金玉ねぢぶくさ』は、怪談・奇談を二十一話載せた浮世草子である。しかし、『優曇華物語』と『金玉ねぢぶくさ』とを比較すれば異なる点が目につく。

然るに此所に雨鐘とて、奇代の事あつて、雨ふればいづくともなく鐘の音かすかにきこへ……彼所をほらせければ、土より四

尺程下に楠の板一枚あり。はねおこしてその下を見れば、歳の程四十ばかりのほうし、……抑御身はいか成人ぞとへば、彼ほうし、我はさんぬるころ此土中へ入定せしものなり。その節一国の人民、我に結縁のため、貴賤くん集して歩をはこぶ中に、よはひ二八ばかりの娘一人、……母親ともに我前へむかひ、一蓮托生と手を合てさりぬ。……あ、うつくしと、彼娘のあだなる像をたゞ一念よそながら思ひし……

その後、娘が既に死んでいたことを聞かされた法師は、みるみるうちに肉が落ち、白骨となってしまった。

『金玉ねぢぶくさ』には、先にあげた『優曇華物語』の注目点のうち①②に対応する部分がない。また、入定した道人は善良な者で③においても異なる。よって、『優曇華物語』が『金玉ねぢぶくさ』を直接の典拠にしたとは見なしにくい。雨鐘伝説はまた、『老嫗茶話』『都鳥恋恋笛』でも利用されている。これらと『優曇華物語』を比較してみよう。

『老嫗茶話』（寛保二（一七四二）年序）は、写本で伝わる近世中期の奇談集である。その中の「入定の執念」には次のようにある。

大風吹て念仏塚の松を根こぎに吹倒しける。……石郭の蓋をとれば、棺の内に恵達、髪髭銀針のこたく炭のをれの様にやせつかれ首にかけたるせうごをならし念仏申居たりけるか、人声を

開て目をひらく。……我、元備前尾嶋のもの。七歳より同国大徳寺にて剃髪して十九才の春より諸国修行して山々嶽々の尊き靈仏靈社を拝み廻り、……入定せしむる砌、此事聞及ぶこの貴せん近江よりつとひ集り、十念授る。数万入押合もみ合我が前に進みよる。其内十八九の美女群集の人を押分、我前へ来り、衣の袖にすかり、ほろりと泣て十念を望む。我此折此女に念をと、むる心有。定めて此故に成仏をとくる障と成しものなるへし……恵達此姥をつくくくと詠めけるか、朝日向ふ霜のこたく皮肉忽消失せて、一具の白骨斗残たり。

『老嫗茶話』では、先にあげた注目点のうち②は対応する部分が存在するが、①はない。また、③も異なる。

では、『都鳥妻恋笛』ならばどうか。同書は、江島其磧作、享保十九年刊、版元八文字屋八左衛門の浮世草子である。『都鳥妻恋笛』④
一の二の当該部分は、

笛の音がすかに聞ゆ。松ふく風の音かと耳をすまして聞ば、まぎれもなき笛の音也。……土四尺計下に、楠の板一枚あり。はねおこさせて其下を見給へば、年の程六十計の法師とは見えながら、……瘦おとろへて眼光り。手に横笛を持って西向に座せり。……愚僧が俗性は賤しからざる者なるが、わかき時女色におほれ親兄弟の異見を用ひず。不義放逸の行跡によつて、……出家

八文字屋本から京伝読本へ

し、卅余年諸国を修行し、……去ぬる比此土中に入定せしが、其時節近辺より聞伝へに、結縁のため貴賤群集して我を拝する中に、はたち計の女中……わかき時より色を好しゆへに、多くの女を見しに、つゝに見たる事なき美人。……此愛着の念によつて、土中に埋れながら往生をとげず……斑女聞給ひて、それはわらは心あたりある事有。七年計以前に吉田へ参詣せし折から、人多く北をさして行くゆへ、何事かとこしもととはせぬれば、……白川の庵にして入定あるゆへ、拝ん為に我人参り候といひしによつて、……仏果の縁をむすばんと、吉田より直に白川の草庵に参りし……上人入定の砌。仇なる女の姿をみて愛着の念を起し、今に往生をとげ給はぬ。其妨と成し女といふはわらはにて有べし。其折から合掌して十念をうけ、目を開きぬれば、上人見とれ給ふ御目と見合。はつとむねにこたへて人にははず今に心にか、りし……

とある。『都鳥妻恋笛』では、鳴り物が鐘ではなく笛になっているものの、①②に対応する部分が存在する。入定した僧侶も善良な者ではなく、不義放逸の好色漢であることから、③と近似する。⑥

つまり、鳴り物は一一致するが細かいストーリーにおいて異なる『金玉ねぢぶくさ』『老嫗茶話』よりも、鳴り物は鐘から笛に変わっているものの、細かいストーリーが一致する『都鳥妻恋笛』を直接

の典拠とみなす方が妥当であろう。^⑦

京伝は入定する道人を大蛇太郎に設定しているが、この大蛇太郎は、実は峻二郎らの仇討ちの相手でもあった。峻二郎・弓児らは仇討ちを果たし家を再興した。詐欺の入定を見ることが、後の展開における伏線として有効に機能している。

三 『風流川中島』から『昔語稲妻表紙』へ

京伝読本の代表作『昔語稲妻表紙』（文化三年刊）は、六字南無右衛門一族の忠節苦難と名古屋山三郎の仇討ちを軸とする。この作品の十七「雪溪の非熊」は、

① 桂之助は、熊に襲われていた嘉門の老母を救い、これを契機として勘助に弟子入りする。

② 勝基は、雪の中をおして嘉門を軍師とするために訪ねてくる。嘉門は、一旦は断る態度を見せるが、その招きに応じる。

③ 老母が自分は母方の祖母にあたることを桂之助に告げ、父方の祖父が書いた短冊で叩き、意見を加える。

④ 老母が勝基の不用心さを詰問すると、勝基は笛を吹き、警備のための伏兵を呼んだ。

と概括できる。右の部分に関する従来の指摘には次のようなものがある。③の趣向は、竹田出雲の浄瑠璃『小野道風青柳硯』（宝暦四

年竹本座初演）二段目を取り込んだものと指摘されているが、これはその通りであろう。②のいわゆる「三顧の礼」については、従来、岩波新体系本の注では近松浄瑠璃『信州川中島合戦』（享保六年竹本座初演）が、『山東京伝全集』（ペリカン社）解題では『通俗三国志』（元禄五（一六九二）年刊）が典拠であるとされてきた。しかしどちらの作品でも、細かい文辞は一致していない。ここで注目したい浮世草子がある。

其笑・瑞笑作の『風流川中島』は、宝暦四年に八文字屋から刊行された作品である。これは『信州川中島合戦』から影響を受けている。長尾・武田の争いを描く中で、さもん娘と勝頼の恋愛、山本勘助の軍略を絡ませたストーリーで、『昔語稲妻表紙』との関わりは、三の一「雪の中の笋捨て戻る老母か命」および三の二「昔の剣今の菜刀切味の能ひ母の教訓」で指摘できる。そのストーリーをまとめれば次のようになる。

① 勝頼は、猪に襲われていた勘助の老母を救い、これを契機として、勘助に弟子入りする。

② また襲ってきた猪のために、勘助が左目を潰したことを老母が責める。

③ 信玄が、雪の中をおして勘助を軍師とするため訪ねてくる。勘助は、一旦断る態度を見せるが、その招きに応じる。

④ 老母が信玄の不用心さを詰問すると、信玄は笛を吹き、警備のための伏兵を呼んだ。

『昔語稲妻表紙』と『風流川中島』とでは、ストーリーに一致する部分が多い。

次に、細かい文辞を比較する。『昔語稲妻表紙』の次の箇所、

湯に伊尹を得、周に太公望をもちひたるも、大将たる人、賢を尊び敬志の厚がゆゑなり。総て国家を治むるの要、賢臣にあり。賢臣を得るに礼讓をあつくせざれば出て仕へず。禄を施し金帛を以て招くとも、賢士を尊ぶ志なき人には仕ふる事なしとかや。扱その時嘉門母のそばちかくより、かの雪中の旅人は何者に候やらん。見るも気の毒の形勢なり。おん心になはざる者ならば、理をのべておん帰しなされずや。某出ておひかへし申さんやといへば、……

と、『風流川中島』の次の箇所、

湯に伊尹を得、周に太公望を用ひたるも、大将たる人の賢を尊ひ、士を敬ふの心厚き故なり。渾て国家を治むるの要賢臣にあり。其賢臣を得るに礼讓尤も厚ふせざれば出て使へず。禄を施し金銀を以て招く共賢を尊ぶの心なき、人に使ふる事あたはず。山本勘助母の傍に寄、最前参りしおのこの用の用かおまへを頼まんとて、此大雪に寒氣をいとはず。雪中に座して居るあり様。

見るも中々笑止千万。御心になはぬ事ならば、わけを得といひ聞せて、御帰しなされませ。おまへ直に仰られてあしき事ならば、勘助罷出て帰し申さんかといへば、……

とを比べれば、細かい表現まで一致している。これ以外の箇所でも、複数一致する。

加えて、『昔語稲妻表紙』の挿絵(図1)は、三場面で構成されているが、

- ① 右上 襲ってきた熊が逃げて行く場面。
- ② 右下 桂之助が嘉門の母を助けて背負って来る場面。
- ③ 左 庵の前の場面。

『風流川中島』の挿絵(図2)を見ると、やはり三場面で構成されている。

- ① 右上 勘助が母を探しに来る場面。
- ② 右下 勝頼が勘助の母を助けて背負って来る場面。
- ③ 左 庵の前の場面。

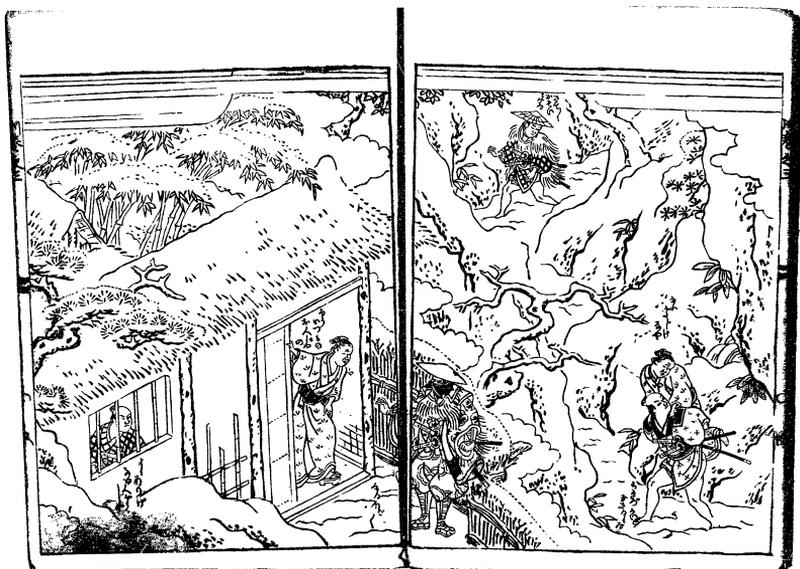
『昔語稲妻表紙』挿絵と『風流川中島』挿絵とを比較すれば、①が異なるが、②③は構図まで一致している。

以上から、『昔語稲妻表紙』は、『風流川中島』を参照している。その後、『風流川中島』では、勘助の怪我は策略で、実は怪我をしていなかったという意外な結末になっている。しかし、これはやや

図1 『昔語稻妻表紙』(関西大学総合図書館蔵)



図2 『風流川中島』(西尾市岩瀬文庫蔵)



無理のある展開と言わざるをえない。

『昔語稲妻表紙』ではその部分を外して、ストーリー上無理のない形にし、老母と桂之助とを血縁関係としている。元々の御家騒動に加え、二つの仇討ちを盛り込んだこの作品では、趣向過多により散漫になりかねない。しかし、人物関係も強化することによってまとまりを持ち、なおかつその趣向が全体的構想と齟齬をきたすことなく、うまく溶け込んでいる。京伝の手際の良さが発揮されているといえよう。

四 『風流友三味線』から『双蝶記』へ

『双蝶記』は、竹田出雲の浄瑠璃『双蝶曲輪日記』（寛延二（一七四九）年竹本座初演）に基づいて構想され、北条氏滅亡後の南北朝対立時代を背景とする。『双蝶記』六「陽炎としきりに狂ふ牡丹の睡猫」から七「木枯の果はありけり記念の竹刀」にかけて、次のようなストーリーを含む。

- ① 山吹余五郎が先祖供養の石塔をたてるために向向くが、その費用を遊郭の遊びで使ってしまう。
- ② 家来南方十字兵衛が余五郎の使い込みを自分のしわざとした遺書をのこし、自害する。
- ③ 余五郎は家来の自害を知って驚き、自分も死のうとするが、

八文字屋本から京伝読本へ

家来の刀が竹光で、そこに自分の死を犬死にしてくれるな、短気を起こさないでほしいと書いてあることに気づく。

『双蝶記』と『風流友三味線』とを比較する。『風流友三味線』は、江島其碩作、享保十八年刊、版元八文字屋の浮世草子である。内容は、お菊・幸助の恋、佐藤定七、起請、酒に託してのさとしなどは豊後節をもとに変改を加え、揚巻、森山一家の苦衷を織り込み複雑な筋を持つ。一の「難波江のあしをとめる遠国の浮気大臣」、一の二「不実な金の才覚罰の当つた太鼓が雑談」、一の三「書残す一ツ通忠義は重き石塔の代金」にも、

- ① 永田幸助が先祖供養の石塔をたてるために向向くが、その費用を遊郭の遊びで使ってしまう。
 - ② 家来森山伝右衛門が幸助の使い込みを自分のしわざとした遺書をのこし、自害する。
 - ③ 幸助は家来の自害を知って驚き、自分も死のうとするが、家来の刀が竹光で、そこに自分の死を犬死にしてくれるな、短気を起こさないでほしいと書いてあることに気づく。
- というストーリーがある。
- 次に、細かい文辞の確認をしておく。『双蝶記』で、余五郎が自害しようとしたところの文章に、

此刀にて切腹せば、主君のおん手打になる同然にて、聊罪を賞

よすがともなるべしと心を決し、両肌をおし脱て、彼刀を抜放しけるに、これ真の刀にあらず、竹にて造りたる刀にて、十字兵衛が自筆の文字あり。これを讀に、拙者此度の切腹犬死に相成不申様御短氣御慎遊され可被下候とかきつけたり。扱は此刀の身を売て百五十両の金をと、のへくれたるに疑なし。此竹刀のかきつけといひ、かくまで深く我身の事を思ひくれける心底の過分さよ、といひて又死骸にとりつき泣けるが、……

とある。また、『風流友三味線』では、
 此刀にて腹をさらば、せめて御先祖の御にくしみも少し軽く成やせんと、覚悟極めて取なをし、扱て見れば竹篋にて、表に我等此度の切腹犬死にならざるやうに奉頼候と書付あり。扱は此刀の身をはづして、卅両の金を才覚せしものよと、猶心底おもひやりて感涙をながし、……

となつており、二つを比べると、細かい文辞レベルでも一致が確認できる。これ以外の箇所でも、複数一致する。

『双蝶記』では、『風流友三味線』を踏まえながらも、竹光に書かれた言葉を増補して「短氣」を誡めるものとし、『双蝶記』の後の部分の苦難に際し、思い出す形で何度も活用している。竹光という道具を『風流友三味線』よりも効果的に使うことで、余五郎の根本的な苦悩の原因ともなっている。その意味において、全体的構想に

まで関わってくる。

五 課 題

近世小説史において、文運東漸―享保期以降、文学の中心が上方から江戸に移った―という考え方がある。このために、上方小説（特に浮世草子）と江戸小説との関連は消極的に考えられてきた。しかし、今回指摘したように、『御存商売物』を執筆した山東京伝においてさえ、従来の認識以上に八文字屋本を利用している。文運東漸を前提としすぎること是不適切ではないだろうか。

今後の具体的課題としては、

- ① 八文字屋本と京伝との関連には、时期的変化があるのか。
 - ② 京伝は様々な小説ジャンル（読本・黄表紙・合巻・滑稽本・洒落本など）で執筆しているが、八文字屋本との関連にジャンルの違いはあるのか。
- などがあげられる。この課題を解決していくためには、さらなる事例の積み上げが不可欠である。
- 現段階で、従来指摘されていない八文字屋本と京伝との関連、
- ・ 八文字屋本『当世信玄記』（月尋堂、正徳三（一七二三）年刊）
 - と京伝合巻『女達三日月於櫻』（文化五年刊）
 - ・ 八文字屋本『女非人綴錦』（南嶺、寛保一（一七四二）年刊）

と京伝合巻『娘景清檻樓振袖』（文化八年刊）

も把握している。これらの事例については別稿を用意する。

近世小説史は、これまで単純化され、いわば図式的な説明がはかられてきた。そのために、上方小説と江戸小説との間には溝が生まれ、「飛石文学史」^⑥が形成された。もちろん、このことは研究史の展開上不可避であった。膨大な作品数が存在する近世小説史においては、まずは文学史全体を把握するための枠組みが必要だったのである。しかし、今後はその枠組みに捉われず、具体的な事例を確実に積み上げ、近世小説史がいかに有機的関連の中で成立しているのかを明らかにすべきであろう。

注

- ① 京伝作品は、『山東京伝全集』（ベリかん社）による。括弧・振り仮名は外し、適宜句読点をつけ直した。以下の引用でも同様の処置を行なった。
- ② 『金玉ねぢぶくさ』は、叢書江戸文庫『浮世草子怪談集』（国書刊行会一九九四年）による。
- ③ 『老嫗茶話』は、叢書江戸文庫『近世奇談集成（一）』（図書刊行会一九九二年）による。
- ④ 八文字屋本は、『八文字屋本全集』（汲古書院）による。
- ⑤ 木越治「八文字屋時代物と怪異小説―『都鳥妻恋笛』の場合―」（近世文芸）六八号、一九九八年六月）で、『都鳥妻恋笛』の該当部分が『金玉ねぢぶくさ』によることを指摘。

八文字屋本から京伝読本へ

- ⑥ 佐伯孝弘『江島其嶺と気質物』（若草書房 二〇〇四年）第二章第2節「隅田川物の中の『都鳥妻恋笛』」が、「金玉ねぢぶくさ」も「都鳥妻恋笛」も、土中入定の僧が直前に見た美女への愛執により往生できぬ点は同じだが、「金玉ねぢぶくさ」は入定が純粹な宗教心からの行為であるのに対し、「都鳥妻恋笛」は入定自体色欲からと変えている」と指摘。

- ⑦ 『都鳥妻恋笛』が曲亭馬琴の読本『隅田川梅柳新書』（文化三年刊）でも利用されていることは、横山邦治『読本の研究』（風間書院 一九七四年）『都鳥妻恋笛』から『隅田川梅柳新書』へ」が言及している。したがって、京伝と馬琴とは、近い時期に同じ『都鳥妻恋笛』を用いていたことになる。また、大高洋司前出論文が、京伝『優曇華物語』（文化三年刊）と馬琴『月水奇縁』（文化元年刊）が同じ八文字屋本『風流曲三味線』（宝永三年刊）を利用していたことを指摘した。

- ⑧ 長谷川強氏が、「近世文学考」（汲古書院 二〇〇七年）の中で、近世文学史の歪みを「飛石文学史」であると指摘し、これを是正すべきだという考えを示している。

〔付記〕 資料の閲覧、掲載等のご許可をいただいた関西大学総合図書館、西尾市岩瀬文庫に対し、深謝いたします。